

ことわざを創作することによって、得られるもの

道岡 義経

1、はじめに

小学生は、主に二つの場面でことわざを学びます。一つは、国語の時間。教科書にことわざ、故事、慣用句が紹介され、それをもとにことわざを学ぶことになっています。たとえば、「カッパの川流れ」なら、意味は「どんな名人でも、ときには失敗することがある」、使い方は「失敗しそうな人が失敗したときに使う」などです。最初の場面では、辞書に書いてあることわざとその意味を覚えることに主眼が置かれており、用法については軽視されがちです。

二つめは、実際にことわざを使う場面。たとえば、漢字テストで間違えたことがない子どもがはじめて間違ったとき、「河童の川流れだね」などと、子どもたち自身がことわざを使うことがあります。すぐに、他の子どもから「弘法も筆のあやまり」ということわざがあげられ、担任が「上手の手から水がもれるということわざもあるぞ」などと紹介します。突発的に起こる一回性の「ことわざの使い方習得チャンス」。上記したような国語のことわざの学習で得ることができない、生きた用法を学ぶことができる千載一遇のチャンス。担任は、このチャンスを逃さず、このときとばかりにことわざの用法を伝えます。このチャンスの重要性を知っていることわざ好きの先生は、いくぶん脱線が過ぎる場合があります、自制しなくてはいけないのですが、なかなかそうはできません。ことわざを学ぶということは、たくさんのことわざを覚え、使いこなせるようになることです。国語の時間に習ったことわざは、実際に使われる場面において補完されることにより、それを達成することができます。

私は、上に紹介した二つの場면을重視しながらも、三つめの場面として、自分たち自身でことわざを創作する活動に取り組んでいます。授業のまとめとして実践している「ことわざまとめ」、授業が早く終わったときなど、すきま時間に取り組んでいる「パロディことわざ」。ここでは、創作ことわざの実践が一般的なことわざの学びで得られない効用があることを紹介します。

2、創作ことわざ「ことわざまとめ」

ニュースでは、連日のように環境問題が取り上げられ、SDGs という新しい言葉もすっかり定着しました。現在、持続可能な社会を目指さなくてはならないという課題は、学校現場にも大きな影響を与えています。理科の「生物どうしの関わり」という単元では、教科書の内容にとどまらず、プラゴミの問題、大気汚染、森林伐採などたくさんのことを学びました。そして、多岐にわたった学習を、ことわざにして一言でまとめようという学習に取り組みました。以下、子どもたちの作品をもとに、創作ことわざの効用を紹介します。

①要点をまとめる力を育てる（要点ことわざ）

「木々がある、だから地球はまわってる」食物連鎖で循環する生き物と、実際に自転している地球のイメージを重ねた作品。多岐にわたった学習内容で、特に大切だと思ったことを短い言葉ぴたりと言い当てています。以下に紹介する他の作品も、要点を短い言葉でまとめることができます。ことわざを創作することにより、要点をまとめる力を育てることができるのでは、ないでしょうか。

「生き物は 自然をつくる 仲間たち」
「プラゴミは 地球にとって バイキンだ」
「排気ガスが地球環境をくずす」
「地球には 森林伐採 悪影響」

②言葉の完成を豊かにする（パロディことわざ）

「エコに分別」という作品は、エコをするためには分別が大切だという意味。そして、「猫に小判」と「馬の耳に念仏」をもじった創作ことわざです。担任としては、特別な指示をしなくてもこのような作品ができることに、日々ことわざに触れ言葉の感性を豊かにしてきた成果を感じます。他の作品には、同じことわざをもじった「ゴミにゴミ箱」がありました。ことわざを創作することにより、言葉の感性を豊かにすることができます。

③心を育てる（道徳ことわざ）

『「バイバイ」を 「またね」にかえる 分別は』は、分別の重要性を訴え、分別することを奨励する作品です。一般的なことわざは、生きる指針やヒントを与えてくれるものがほとんどです。下に紹介するように、ことわざにまとめさせることにより、自分の行動を律したり、他人に呼びかけたりするような作品がほとんどになりました。地球環境にどのような心持ちで関わっていくか、ESDでは、環境問題を遠くの出来事と受け止めるのではなく、自分もその一端を担っているという心を育てることが重要だと言われます。ことわざは、創作することによりその心を育てることができるのです。

「エコ活動 地球を変える 第一歩」
「知らないの 自然は見てる 君の事」
「ポイ捨ては 君に幸せ 与えない」
「助け合え 海と人間 一つになる」
「緑を守ろう！ 地球の涙が あふれていく」
「また会える 君が資源に変わるから」
「環境にやさしい心あれば、空気、海、やさしくなる」
「リサイクル ゴミを分別 再利用」
「青い光の中に命ある」
「ゴミ箱は ゴミのあるべき場所なのだ」
「よごさない 海に生き物 いるんだよ」
「地球には 森林伐採 悪影響」
「資源には 限りがあるよ 節約しない？」
「エコすると 街中のゴミ なくなるよ」

3、創作ことわざ「パロディことわざ」

意図をせず授業が早く終わることがあります。また、意図をして授業を早く終わらせることもあります。そんなすきま時間、授業の後半を使って、短い時間で取り組みました。導入では、「猫に小判」に対して、江戸時代に使われていた「猫に牡丹」ということわざがあったことを紹介しました。言葉の厳しい生存競争の中で、「猫に小判」は生き残り、「猫に牡丹」は使われなくなってきたことを伝え、現在すでに使われていることわざを元にして、新しいことわざを作ろうと呼びかけました。

最初、子どもたちは戸惑っていましたが、どちらかという学習が苦手な子どもが「三日ポン酢」という創作で、大爆笑をかつさうことで急激に作品の質が高まっていきました。「それは、ことわざじゃなくて慣用句だよ」という指摘もありましたが、慣用句もことわざに含めることを確認することで、さらに創作しやすい環境が生まれました。以下、子どもたちの作品を紹介しながら、創作パロディことわざの効用を紹介します。

①知っていることわざが増える

パロディにするためには、元のことわざを知ってを知らなくてははいけません。子どもたちには、タブレットを使って一覧を開かせ、元になることわざを見つけさせました。教科書で受動的にことわざを学ぶよりも、積極的に楽しんでことわざを探していました。「先生、こんなことわざもあるよ」という笑い声があがり、自然にことわざを習得することができました。

②言葉遊びの技法を学ぶ（韻を踏む、つけ句）

子どもたちは、自然に二つの技法を使って創作していました。特に韻の踏み方は、指導していた担任も舌を巻いてしまうほど優れていました。角(kado)→かも(kamo)、福(fuku)→ふぐ(fugu)、猫(neko)→エコ(eko)。途中で優れた作品を紹介すると、以下に見るように、さらにこのタイプのパロディことわざが数多く生み出されました。

「エコにこぼん」

「とぼけの顔は、三度」

「仏の顔を、サンド」

「はがし上手は、貼りじょうず」

「おでんにうで入れ」（のれんにうでおしが元）

「絹はいつときの美味、もめんは一生の美味」（とうふについて）

「ちびも積もれば高くなる」

「線は点より長し」

「ゼニで鯛を釣る」

「笑うカモにはフグ来たる」

「ぶたにキッシュ」

「エコの手も借りたい」

「イスの上にも三年」

「苦いから目薬」

また、数は少なかったのですが、つけ句で作品を創作した子どももいました。「泣きっ面に蜂」を元にした作品「泣きっ面にハンカチ」は、蜂の間に「んか」を付け加えることによって、元のことわざとのギャップを楽しむ作品です。また、友達が作った「イスの上にも三年」につけ句して、すぐに「アイスの上にも三年」と創作した子どももいました。言葉遊びの技法が身につく、自然と言葉の感性が豊かになるのも、この取り組みの効用といえるでしょう。

③意味のギャップを楽しむ（入れ替えことわざ）

「三日坊主」と「三日ポン酢」は、とても似ている言葉なのに、それぞれ全く関係のない意味を持ちます。子どもたちは、そのギャップの落差こそがパロディだということに自然に気がきました。

上記した②の作品群は、技法に注目したために、別枠で紹介しましたが、すべての作品は、③にカテゴライズされるべき作品でと言えます。落差を大きくするために、元のことわざの意味をより深く知ることができるという効用もあると思いました。

また、「言葉で笑わせるためには、どうしたら良いかまで学ぶことができます」とまで書いてしまうと言い過ぎでしょうか。以下に、子どもたちの作品を紹介しますが、これを読んでいる方にも笑顔になってもらえることを願います。おもしろさが伝わるように、作品の後に、担任の「つつこみ」を入れさせていただきました。

「東大一人暮らし」 本郷あたりのワンルームマンション
「かわいい子には足袋をはかせよう」 よっ 成田屋！
「病は木から」 花粉症
「蛇に笑われた蛙」 食べられるよりはマシ
「ママをつついて鬼を出す」 わざとの思春期
「鬼にうまい棒」 うまい棒でゆるしてください
「山折り谷折り」 折り紙の基本
「おれの目にも涙」 キャプテン男泣き
「パンは剣よりも強し」 花より団子ってこと？
「亀の甲より Toshi の声」 (Toshi は、x JAPAN のボーカル)
x JAPAN ファンならそうあるべき
「きみもツボれば、やばくなる」 そのツボを知りたい

4, おわりに

ことわざを創作するという主体的な活動は、ことわざを学ぶという受動的な学習に比べ、たくさんの数を習得させるだけでなく、その意味や用法を深く理解させます。それだけではなく、言葉そのものの理解を深め、心まで育む非常に効用の多い学びと言えるでしょう。学習効果にばかり注目した報告になってしまいましたが、一番の特徴は、創作しているとき、できちゃった作品を鑑賞しているときが楽しい時間であることを最後に付け加えたいと思います。楽しそうに創作している子どもたちの姿が伝わったら幸いです。

～～～

道岡義経 プロフィール

小学校教員。ことわざ授業づくり研究会会員。全面教育学研究会会員。子どもにロックを教える会会員。